

日本語の史的変化

2011年7月3日 中日理論言語学研究会コメント・レジメ 鈴木 泰（専修大学）

【形態論的变化】

ムード		テンス	アスペクト	現代語形式	古語形式
のべ たて	断 定	非過去	完成	のむ	のみつ、きえぬ
			継続	のんでいる	のむ
		過去	完成	のんだ	のみてき、きえにき
			継続	のんでいた	のみき
	推 量	非過去	完成	のむだろう	のみてむ、きえなむ、のみつらむ、きえぬらむ
			継続	のんでいるだろう	のまむ、のまんず、のむらむ
		過去	完成	のんだだろう	のみてけむ、きえにけむ
			継続	のんでいただろう	のみけむ
働き	命令		のめ	のめ	
かけ	勧誘・希望		のもう、のみたい	のまな、のまね、のまなむ、のみてしがな、のまばや、のままし、のままほし	

日本語の文法の形態論的な体系の古代から近代にいたる変化は、まさに総合的傾向から分析的傾向への進化であるといえる。その1つとしては、よく指摘されることであるが、古代語においては、過去・完了を表す形式がツ、ヌ、タリ、リ、キ、ケリと6つもあったのが、現代語ではタ、1つになることである。しかし、古代語の過去・完了形式のそれぞれがどのような意味・機能で用いられていたかが明確にされていないにもかかわらず、数が減ったというだけですませるべきではない。しかも、このような取り上げ方は、助動詞の何もつかない、動詞だけの形（はだかの形）を時間表現のメンバーに入れていない点にも問題がある。

そのような立場からとらえるなら、アスペクトをめぐる体系においては、古代語では接辞タリ・リ形式が完了（パーフェクト）を表す専用形式として存在しており、助辞ツ・ヌ形式と〈はだかの形〉とによる完成・不完成のアスペクト対立から完全に独立していたのに対して、現代語ではパーフェクトの用法は、継続相アスペクトを表すシテイル形式によって表されるようになり、アスペクト対立から完全に分化することができなくなっているということが、まず第1の大きな変化として取り出すことができる。

一方、テンス体系においては、その対立の構図は古代語と現代語とで基本的に異ならず、大きく〈過去〉と〈非過去〉に分かれるが、両者を比較すると、過去形の意味はそうちが

わないのだが、非過去のはだかの形が古代語では基本的に現在を表したのに対して、現代語では未来を表すようになったというのが、第2の重要な変化である。

もう1つ取り上げることができることとしては、古代語においては、推量を表す形式が、ム、ムズ、ケム、ラム、ナリ、メリ、ラシ、マシ、ベシ、マジ、ジの11個もあったのが、現代語ではウ（ヨウ）、ソウダ、ヨウダ、ラシイ、マイの5個になったとされることである。これも時間表現の場合と同様に、意味の質が異なるにもかかわらず、推量のヴァリエーションであるという以上に議論を深化させないまま、数の減少の問題としてのみとらえることには問題がある。

推量形式と関係が深い表現として、発話において伝達される情報の出どころを指示するエヴィデンシャリティー（*evidentiality* 証拠性）というカテゴリーがある。情報の直接的な出所を指し示す *evidential*（証拠的）な形式として、古代語には視覚に基づくことを表す助辞メリ、聴覚に基づくことを表わ助辞ナリがあり、これらは、古代語においてすでに婉曲の意味から推量的な意味にも拡大している。また、ラシは兆候に基づくことを表すという点で特異な形式として強い推量性を持っていた。これらの意味は現代語では助辞ソウダ、ヨウダ、ラシイに受け継がれている。

付言しておけば、*evidential* な表現に関する古代語と現代語との違いはむしろ、推量のムードをもつものより、断定の意味において現れる、タリ・リ形式によって表される表現が古代語にはあったが現代語にはなくなったことである。タリ・リ形式による場合は、そのパーフェクトとしての意味と結びついて、運動の成立の認知が、運動の結果や痕跡などの証拠に基づくことを表すので、間接的なエヴィデンシャリティーを表すものである。ただし、証拠をメノマエにすることによって、ただちにそれをもたらした運動の存在を確実なものとして断定するという意味であるので、推論性はよわく、断定の意味の変種であるといえる。この意味のものは、現在の琉球方言にも残っているが、現代標準語には残っていない。また間接的なエヴィデンシャリティーの表現としては、さらに接辞ケリによって表される場合があり、証拠の質はともかくそれと接することによって、思いがけないできごとの存在に思い至るといふ、つよい推論性をもつが、やはり断定の意味の変種であると考えられる。なお、ケリは、語られる内容が先行する伝聞や伝説に基づくことを表すことにより、物語的な過去というテンス的意味も獲得するようになる。

【統語論的变化】

古代語においては、対格形式が間投助辞のヲから生まれるまでは、主格と対格は区別されず、ともに名詞のはだかの形によって表されていた。文において主体が何であり、客体が何であるかを表しわけける仕方の違いに基づいて言語の類型論的变化が生ずる面があるとすると、この状態は明らかに現代日本語とは異なっている。現代語が主格対格言語であることは確実であるが、古代語はそうなる途上にあつたにしても、完全には主格対格言語にはなりきってはならず、先行する言語類型の残滓を背負っていたと見なければならぬ。

また、現代語が主格対格言語として、主格はガ格、対格はヲ格という、やや過剰なしるしづけ性をもった体系になるまでに、いったん主格ははだか形、対格はヲという体系が存在したかどうか問題になる。

古代日本語では、ル・ラル（ユ・ラユ）形式は、受身、自発、可能、尊敬を表すとされるが、尊敬が非態的意味で、しかも後出であるので除いても、受身、自発、可能に共通する態的意味をはじめから持っていたとは思われない。また、主格と対格がともにはだか形で表しうる格体制のもとでは、能動文と受動文も格形式の面では区別できないということから、その時点では、厳密には態の対立も存在していないと見ることができる。従来の説に受身は自発から生じているといわれるように、能格言語に見られる不随意的な行為を表す意味の形式が主格対格言語に変化する過程で受身の意味を獲得する一方で、形態の保守性により自発、可能の意味も残存したと考えるべきであろう。近現代語において、レル・ラレル形式が、ほぼ受身を表す専用形式となったということは、完全に日本語が主格対格言語になったということを示すものと考えられる。

なお、古代語において完成相を表すツとヌは、しばしばツが他動詞、または意志動詞につき、ヌが自動詞、または無意志動詞につくという相補的な分布関係にあると指摘されてきた。

	活動物主語	非活動物主語
他動詞	ツ（ヌ）	×
自動詞	ツ（ヌ）	ヌ

ここで、意志性の有無とツとヌの出現の相関性がたかいということは、このシステムが動詞の種類が自動詞と他動詞という対立に集約される以前の状態を反映しているためではないかと考えさせる。述語の形に主語が活動物であるか非活動物であるかの違いを記しづける活格類型の言語の特徴に照らすなら、ツとヌの接続の違いはまさに日本語か活格言語類型に属していたことを示す名残ではないかとも思われるのである。これが自他の対立と相関しているように見えるのは、主として他動詞が活動物主語の運動を表す述語から生まれ、自動詞が非活動物主語の状態を表す述語から生まれた結果であると考えられる。

古代語から近代日本語への統語論上の歴史的変化のなかで、もっとも大きなできごとの1つは係り結びの消滅という事実であろう。古代語は、森重敏のいうように、係り結びという形で、情意的な断続関係によって客体的な出来事を包みこむことによって文を構造化していたのが、近代日本語では、格助辞の整備がすすめられ、包まれる側の出来事の論理的な構成の面から文を構造化するようになったというところに、文成立の古代語から現代語への変化を見る見方もある。そのような見方は、係り結びという現象を、係り助詞と用言との呼応という形式的な面でのみ理解するのではなく、主語と述語と間に存在し文成立を確認するものとすべきであるという川端善明の説とも連続している。この見方にたつなら、形式的な係り結びが消失してもその機能は存在し続けていると考えられることになる。また、係り結びの消失を、焦点化や、話者に依拠して文を情報論的に分割構造化するため

のものであったのが、その機能がなくなったことに求めることもできる。

[鈴木泰]

[文献]

Е. М. Колпакчи: Очерки по Истории Японского
Языка (Наука Москва - Ленинград, 1956)

森重敏: 『日本文法通論』 (風間書房, 1964)

坂倉篤義: 『日本語表現の流れ』 (岩波書店, 1993)

川端善明: 係り結びの形式 (『国語学』 176, 1994)

G.A. クリモフ: 『新しい言語類型学—活格構造とは何か』 (ナウカ, 1977 / 石田修一訳,
1999, 三省堂)

松本泰丈: 『連語論と統語論』 (至文堂, 2006)

N.A. スイロミヤートニコフ: 『近世日本語の進化』 (1978, ナウカ / 2006, 植村進訳,
松香堂)

鈴木泰: 『古代日本語時間表現の形態論的研究』 (ひつじ書房, 2009)

鈴木泰: 古典語のパラダイムについて (『日本語形態の諸問題』 ひつじ書房, 2010)